

天声人語

小さなどら焼き店の雇われ店長が、突然訪れたおばあさんから雇ってほしいと言われる。50歳になつたが、「客の前に出なきゃいいんだ」と採用を決める▼元ハンセン病患者を主人公に、ドリアン助川さんが書いた小説『あん』である。おいしいと評判になり店は繁盛するが、やがて病気のことが噂になり、客が減り始める▼執筆のきっかけは1996年の「らい予防法」廃止だったと、助川さんが本紙に語っていた。ハンセン病患者を社会から強制的に隔離し、差別の温床になつていた法律がなくなつた。それから20年。裁判所も差別を助長していたとして、最高裁が一昨日謝罪した▼ハンセン病患者の裁判では72年まで、通常の法廷でなく療養施設などでの「特別法廷」が数多く開かれていた。確実に治り感染力も低いので隔離は必要ない、それが明確になつた後も続いていた▼もし事実上の非公開であれば公正な裁判とは言い難い。最高裁は開廷の貼り紙が療養所の正門などに貼られたのを理由に「一般の国民の訪問が不可能であつたとまでは言えない」としたが、強弁ではないか▼作家の北條民雄は患者として隔離された後に執筆を本格化した。ハンセン病を題材にするのは、2千年に及ぶ患者たちの苦痛が目に映るからだと書いた。長く続いた差別をなくす方へと、前進しているのは間違いない。しかしその歩みはあまりに遅い。

2016・4・27